

つの消毒風呂に入ってから新しい褌、シャツ、衣服等が支給された後兵舎に収容された。その日に食べた日本料理の味はそれまで味わったことのない味で、いわゆる「お袋の味」をかみしめることができた。

援護局職員から身上調査があったが、チタ地域のバダー飛行場で将校等宿舍の建築作業の時通訳をしていたので、別棟の米軍の特別調査室で米軍の日本人二世から飛行場の状況、建設状況等について調査尋問された上、この事について半年位後に東京丸の内の米軍司令部から呼出しがあるから出頭するようにと指示された。この件については呼出しがあり当局に出頭して取調べに応じたが、何事もなく終了した。

その後舞鶴駅より帰郷の特別列車に乗車して深夜、名古屋駅に到着した。駅には親族、知人等多数の人が出迎えに来てくれており、日本に帰ることができた喜びを再確認できた。

帰国できて落着きもできたので、昭和二十四年

四月に土木建築会社名古屋支店に入社して、三十四年間病気をすることなく健康で勤め上げて、昭和五十八年退社して現在に至っている。

常に思うことは、地獄のようなシベリアから生還できて幸せな生活のできたことは、祖国日本に帰ることなく当時の年齢のままシベリアの凍土の中で眠っておられる戦友のおかげであることを忘れないようにと、常日頃、戦友達の霊に合掌しております。

忘れることのできない捕虜生活

愛知県 土居 好 太

大正十（一九二一）年三月二十七日に香川県で生まれ、その後上級学校入学のため姉が生活している東京に行ったが、姉の家庭の都合で入学することができず、東京都内の有名な果実店に就職して徴兵検査の年まで勤務した。

徴兵検査で香川県に帰り、検査の結果甲種合格となり、虎林駐在の満州第六三九部隊陸軍病院に入隊勤務した。

昭和二十(一九四五)年六月頃に虎林の陸軍病院が牡丹江掖河の陸軍病院と併合されることになり、牡丹江への移動の準備要員として牡丹江―虎林を行き来している間にソ連軍が侵攻して来て、横道河子で武装解除された。

武装解除後、衛生兵四十人で衛生隊が編成されて、ソ連に連行される日本兵士等で病氣、負傷で連行途中落伍する者の手当等をしながら綏芬河からソ連領グロデコーボに入り、グロデコーボで満州から連行された日本兵士の病人の手当と死亡した兵士の後片付けを行った。

日本人が死亡すると、担架に乗せて埋葬地のソ連軍が掘った戦車壕まで運んで、その場で死者の着ていた服を脱がせて裸にして戦車壕の中に投げ入れて埋葬した。この時、死体を埋葬した後の担架に付いていた虱が白い砂のように担架いっぱい

に広がっており、集めると手のひらに二、三杯位あった。今でもこの虱のことを思い出すとゾーとした寒さを感じる。

戦車壕と病院の庭を掘り起こして埋葬した日本兵は約六百体はあったと思う。埋葬した後は、戦車壕も病院の庭も平地にしてジャガイモを植える畑にしていた。

一昨年厚生省の遺骨収集に同行しグロデコーボの埋葬地を探しに行ったが、埋葬されたと思う場所に案内してもらえず、違った場所で心ばかりの供養をしたが、できたら日本人の埋葬場所を探してその場所で供養したいと考えている。

綏芬河經由で入ソした日本兵も、一段落した後はロシアの病院を出てウスリースクの近くのスパスターシベという所へソ連軍の暖房用の薪作りで十二人が山に入った。この薪作り作業を約六カ月位した後グロデコーボに戻り、この地で約一千人位の集団をつくり、汽車でハバロフスク經由でコムソモリスクに連れ込まれた。この時は昭和二十

一年九月頃ではなかったかと思う。特定の定められた作業はなく、毎日雑役のように、今日は煉瓦工場、明日は土木作業と変わっておった。この頃夏服を着ていたため、九月という冬で寒くなってきた。ある日、雨から雪に変わったが作業を停めることなく仕事を続けさせて、寒さと空腹、疲れで今にも死にそうになつたので、コンボーイに「この状態のままだと死んでしまうから銃で撃ち殺してくれ」と叫ぶと、コンボーイが驚いて作業を停めて宿舎に帰ることができた。

このように極限の生活をしているために健康であつた体が病気になる、入院することになつた。入院治療をしておるとき、担当の看護婦が自分の国に帰ることになり、看護婦が不足するから衛生兵の私に看護兵として仕事をするようにと病院長から言われたが、入ソ時から一緒にいた戦友達と別れるのが嫌で病院勤務はしたくない旨を伝えるとき、病院長は、病院勤務をしなければ労働のきつい収容所へ出すと言うので病院勤務をすること

にした。

病院勤務中に日本への帰国の話が出て来たので日本に帰る日も間近だと思つておる時に、病院長から「近日中に日本に帰る者が出るが、一回に全部帰国できないのでこの地に残る者も出るから、残る日本人のためにもう少し残留してくれ」と言われ、帰国できないことになり気落ちしたが、病院長の言うとおり残る日本人もおるので嫌とも言えず残留組となつた。この頃通訳から聞いた話では、女医の診療長は病院長に「よく働く土居をどうして帰さないのか、よく働く者から帰すのが順序ではないか」と怒つていたが、病院長は看護婦が不足しておるから止むを得ないと言つていたと話してくれた。

昭和二十三年十一月頃帰ることになり、コムソモリスクから汽車でナホトカに入り、約一週間位で「山澄丸」に乗船して函館港に入港し、タコ部屋のような所に入れられた。MPの取調べの時、コムソモリスクを出発する際にロシアの看護婦が

「忘れないように」と言って渡してくれた写真二枚が見つかったため、MPがこの二枚の写真をどう理解したか分からないが、その後約一年位、私宅に来る手紙は全部開封して検閲してあった。いわゆる共産党系の要注意人物とみなされていたのである。

書いてきたことに記憶違いもあるかもしれないが、シベリアでの地獄のような生活をさせられたことは忘れることができない。

帰国できた幸せと、いまだに凍土の中に眠っておられる戦友に対する慰霊の気持ちは忘れないつもりだ。

抑留生活の記憶

愛知県 永井 鎬

愛知県東春日井郡勝川町柏井下条厚字股で、大

正十（一九二一）年五月五日生まれる。

昭和十一（一九三六）年三月三十一日、味美小
学校高等科卒業。

卒業後家事農業に従事しながら大企業に就職し、家族ともども銃後の護りに専念した。

昭和十六年度の徴兵検査で合格し、昭和十七年七月一日、航空浜松中部第七五部隊教育隊に入隊。

昭和十七年十一月十日、満州の首都新京（長春）の南領の満州第二氣象連隊八三九七部隊に転属、氣象班勤務となる。

ソ連軍侵攻時は牡丹江の服務から新京に転属を命ぜられた時で、新京では、当時の状況下では日本軍の活動は余りよくなく、近いうちにソ連の動きがはつきりする、各自一層努力、任務遂行を厳しく伝えられていた。

新京では、後の反撃地点として奉天（瀋陽）を横の一線で戦える状態を作るべく、移動を計画していた。

八月十四日、部隊所属の送信所を爆破すること